

# 博物館

## ニュース

No.56



国会議事堂の内装に使われている徳島県産石灰岩

大正時代から昭和の初めまで、現在の阿南市や周辺地域では、建築用石材として石灰岩（大理石）が多量に切り出され、全国各地の建築物に使われました。その中で最も有名なものが、1920年（大正9年）に着工され、1936年（昭和11年）に落成した国会議事堂です。

東京都千代田区永田町にある国会議事堂では、外装には花こう岩、内装にはおもに石灰岩が使われています。その大部分は国内産です。内装用石材の中で多用されているのが徳島県産の石灰岩で、しかも最も目立つ場所に多く使われているように見えます。県別にみた場合、内装用石材としての

使用量はおそらく最大でしょう。

写真はこうした石材が使われている場所のひとつ、国会議事堂3階の天皇御休所前広間で撮影したものです。中央の部屋が天皇御休所で、その出入口の彫刻と左右の壁に使われている、やや黄色みを帯びた石灰岩（石材名：時鳥<sup>ほととぎす</sup>）は阿南市阿瀬比町<sup>あせひちょう</sup>から切り出されたものです。この石材は、2階と3階をつなぐ中央階段にも大規模に使われています。また、壁の下（リュックが置いてあるあたり）のやや黒っぽい石灰岩も、阿南市の別な場所から切り出されたものです。

（地学担当：中尾賢一）

# 上八万盆地の園瀬川の古流路

両角 芳郎

園瀬川は身近な川ですが、とても“不自然な”川です。上八万盆地（こういう名称があるか知りませんが本稿ではそう呼ぶことにします）では、平地の地形的に一番低いところではなく、堤防に囲まれて眉山寄りの小高いところを流れています。そして、寺山の北側の狭い鞍部をぬけ、平地を横切って向寺山の山沿いに至ります。

私は日ごろ園瀬川を眺めながら、この不自然さが気になり、これはかなり人の手が加わった川ではないかと感じてきましたが、昨年、園瀬川の古流路について少し調べてみようと思い立ち、文献を当たったり現地を歩いたりしてみました。その結果、園瀬川はかつては現在とは違うところを流れていたことを確信しました。このことは文献にも記述があるので歴史学・地理学関係者には周知の事実だとは思いますが、私の周りの人の認識度は低く、一般にはあまり知られていないのではないかと思います。そこで、改めて確かな記憶として留めておいていただきたいと思います、この小文を書くことにしました。

## 八万村史および名東郡史にみられる記述

残念ながら「上八万村史」はどこの博物館や図書館にも所蔵されておらず、調べることができませんでしたが、「八万村史」と「名東郡史」に園瀬川の旧流路に関する記述がありました。要点を以下に列記してみます。どちらも八万村内の園瀬川の付け替えについては述べていますが、上八万村内の改修には言及していません。

- 「八万村史」（昭和10年発行）
  - ・昔の園瀬川は、上八万村から八万村に入り、東流して市原あたりで川筋は3つに分かれていた。そのため三

条川（三条川）という名称も残っている。三條川の本流は現在の冷田川に当たる。

- ・蜂須賀家政が命じて法華川（法花川）を穿ち、横土手を築いて三條川の本流をこれに流すようにしたのが現在の園瀬川だと言われている。
- 「名東郡史」（昭和35年発行）
  - ・山間を流れてきた園瀬川は、西光寺付近の平地に出たあと大きく湾曲して眉山山麓に触れ、深い淵を形成した。粟淵という地名が残っている。
  - ・そこから川は東へ2、3に分流したが、本流は中筋を通るものだった。この本流は大木の南東で南北に走る山地に突き当たって大きく湾曲していた。
  - ・寺山の西隣の小山には、平安時代に建立された金剛光寺があった。寺が栄えた鎌倉時代には境内に麴伽池と称する庭池があったと伝えられているが、この池は昔の園瀬川の流路の一部であったらしい。
  - ・古老の話によると、中筋近辺には最近まで所々に池沼があり、昔の河底らしい痕跡を残していた。
  - ・その後、寺山北側の鞍部に通ずる支流が発達して、これが本流となった。
  - ・蜂須賀家政が徳島城の造営に当たり、防備上の見地から法花川を穿ち、三條川の下流である冷田川を改修するなどの川筋の変更を行い、今の園瀬川が出現した。

## 絵図に描かれた園瀬川の流路

現在の園瀬川が江戸時代初期の付け替え工事によって生まれた川であるとする、昔の絵図にそれ以前の園瀬川の流路に関する手がかりがないかと思い、博物館や文書館、図書館でいくつかの絵図を見せてもらいました。しかし、現在残っている江戸時代の絵図のほとんどは、時期的には付け替えが行われた後に描かれたものですが、山地や川筋は見取図的にラフに描かれていて、上八万盆地内での園瀬川の古流路の手がかりは見当たりませんでした。ただし、測量にもとづく精巧な絵図として有名な「文久3年徳島及び周辺絵図」（徳島大学附属図書館蔵）では、現在とあまり変わら



図1：園瀬川の流路跡と考えられる低地（川西地区）。  
右手の竹やぶが現在の園瀬川の堤防。

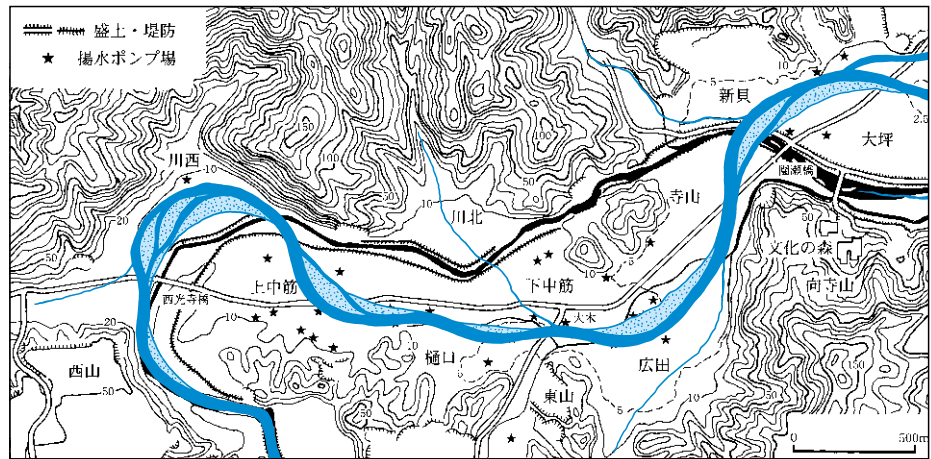


図2：盆地の北端を通る園瀬川の堤防（下中筋地区）。  
寺山北側の鞍部に川を導いている。



図3：規模の大きな揚水ポンプ場（大木地区）。  
大木団地、東山団地などで使う水道の水源地となっている。

図4：上八万盆地の地形と推定される園瀬川の古流路。揚水ポンプ場の位置は徳島市発行「2,500分の1徳島市全図」による。実際には小規模のものを含めるともっと多くの揚水ポンプ場がある。



ない園瀬川が描かれていますが、上八万および八万地域を通して人工的に築かれた堤防の記号が描かれているのが注目されます。

## 上八万盆地の地形と園瀬川の古流路

「名東郡史」の園瀬川に関する記述はかなり信憑性があります。上八万盆地の地形等と照らし合わせながら少し検証してみたいと思います。

### ●湾曲した眉山の山裾と細長い低地

佐那河内村から上八万町へ山間の溪流として流れてきた園瀬川は、西山の北東、西光寺橋のあたりで上八万盆地の平地へ出ます。そこには広い川原が形成されています。ここで注目されるのは、湾曲した眉山の山裾とその南に広がる細長い低地です(図1)。ふつう、山地の河川が山体の側面にぶつかって方向を変えると、山体を掘削して大きく湾曲した地形をつくり出します。河川は山裾寄り流れ、内側には広い川原が形成されます。流路がショートカットされると、旧河道は三日月状の池や低地となって残ります。「名東郡史」にもあるように、園瀬川はここで大きく湾曲し、眉山寄りを流れていたと考えられます。細長い低地はかつての流路に当たり、園瀬川の付け替えで堤防が築かれた後に田圃に造成されたものと考えられます。

似たような湾曲した地形は、文化の森がある向寺山の西側にも認められます。ここでも、かつての園瀬川は大きく湾曲し、現在の八万町新貝方向へ北流していたものと推察されます。

### ●寺山北側の鞍部に川を導く高い堤防

現在の園瀬川は、高い堤防で仕切られて盆地の北の端を通り、寺山北側の鞍部に向かいます(図2)。この辺りの園瀬川は水がよどみ、まるで「運河」といった様相を呈しているところもあります。

寺山は、眉山南麓のひとつの尾根が階段状に低くなってできた小山です。その北側が鞍部になっていたとはいえ、もともと園瀬川の本流が通るほど地溝状に低くなっていたとは考えにくいことです。おそらく園瀬川の付け替えに当たって、岩盤を掘り下げたのではないかと思います。そう思いながら時々ここを通ってみますが、今のところ確たる掘削の証拠は見つけていません。

### ●盆地内にある多数の揚水ポンプ

上八万盆地には、至るところに上水道用あるいは田圃への灌漑用の揚水ポンプが設置されています(図3)。平地の地下にはかつての川筋に沿って堆積した礫層が複雑に積み重なって分布しており、そこを通る豊富な地下水脈があると考えられます。上中筋に住む友人の話では、自家用の打ち込みパイプ式の井戸をつくった際、地表から2mほどで砂利層に当たり、園瀬川の水位が高いときはパイプから地下水が自噴したとのことでした。

園瀬川の水は、少し日照りがつづくとも西光寺橋の下あたりですぐに枯れてしまいます。それは、園瀬川の水がこのあたりで伏流水となり、かつての川筋に沿った礫層へ流れてしまうためだと考えられます。

以上に述べたことを総合しながら、江戸時代初期の付け替え工事以前の園瀬川の古流路を大胆な推定を交えて描いてみました(図4)。

言うまでもなく、上八万盆地を流れる園瀬川は、ふだんは水量が少なくてもしばしば洪水を起こし、その度に砂礫を運び、流路を変え、その繰り返いで幅広い平地を形成してきました。図に描いた流路も常に一定だったわけではなく、ある一時期のイメージを示すものであることをお断りしておきます。(館長)

## もうひとつの細川成之画像

阿波を代表する古刹であり、文化財の宝庫としても有名な丈六寺には、国指定重要文化財である細川成之画像(図1)があります。成之(1434~1511)の晩年の姿を描いており、茶色の袈裟を着け、腰をかけた様子です。やせた出家姿とはいえ、鋭い目や真一文字に結んだ口などは、戦国武将の面影をとらえています。当館では、この画像の原寸大の複製品を制作し、常設展の「中世の阿波」コーナーで展示しています。

細川成之は、阿波国守護だった細川持常(1409~1449)の養子となって阿波細川家を継ぎ、守護を務めました。室町幕府が弱体化するきっかけとなった応仁・文明の乱(1467~77)に際しては、同族の細川勝元を助けて活躍しました。勝元の死後には、細川氏一族の中心として幕府内でも重きをなしました。和歌や絵画に優れるなど、文化人としても知られ、荒廃していた丈六寺を曹洞宗寺院として再興しました。

ところで、当館には、別の成之画像が収蔵されています(図2)。丈六寺所蔵細川成之画像の模本ですが、現状とは異なり、画面が欠けているところがたくさんあります。かなり傷んでいる状況を描いていることが分かります。

この成之画像が収められた箱には、1915年(大正4)12月の箱書があります。それによれば、石原六郎(1873~1932)の依頼により、京都大学の絵師が模写したものだということです。丈六寺にある実物は1916年に修理されているので、この模本は、今では分からない修理以前の様子を、実物に即して記録した資料といえます。

ここで石原について触れておきましょう。彼は、鴨島町の旧家に生まれた実業家でした。1915年10月、阿波郷土史を中心とする日本史の資料を



図1 細川成之画像 丈六寺所蔵  
(国指定重要文化財)



図2 細川成之画像模本 当館所蔵

集めた私設図書館「呉郷文庫」を設立したことで知られています(呉郷文庫の蔵書の多くは、現在、県立図書館に収蔵されています)。模写された成之画像も、この文庫に収められていたのではないかと思われます。呉郷文庫には、徳島県出身の歴史学者として著名な喜田貞吉(1871~1939)が顧問として迎えられていました。喜田は当時、京都大学講師でしたから、彼の仲介により、模写が実現したのでしょうか。

模本や複製品というと、「ニセモノ」と思われることが多いですが、ここに紹介した画像のように、それ自体が資料として固有の意味を持つことがあります。また、この世にただ一つしかない文化財と同質ではないものの、それが持つ情報を伝えていることはいうまでもありません。

(歴史担当：長谷川賢二)

# 石とくらし

石器時代から現在に至るまで、石（岩石）はくらしの道具、装身具、建築材などに利用されており、いろいろな種類のものが用途によって使い分けられてきました。かつては、比較的身近なところで採掘した石を使うことが多かったのですが、近年では外国から製品～半製品として輸入したのを使うことが主流になってきています。

この企画展では、県内での事例を中心にして、さまざまな道具の材料としての側面、鉱石としての側面、建築材としての側面など、いろいろな角度から人間生活と石との関わり合いを紹介します。

## ● 展示構成

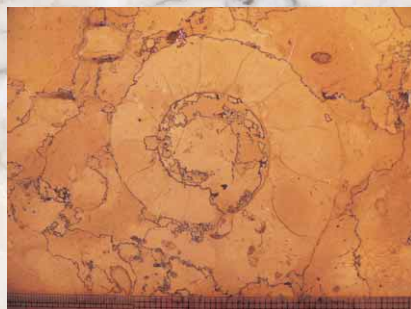
- (1) いろいろな石
- (2) 古代のアクセサリー
- (3) 石と祈り
- (4) くらしの道具
- (5) 鉱石
- (6) 石材



縄文時代のひすいの大珠  
(大ぶりの飾り玉)。  
(ともに富山県)



赤色の顔料や水銀の鉱石として  
採掘された鉱物 (阿南市水井町)



輸入石材の中のアンモナイト化石 (徳島市)



板碑 (神山町)



東山鉱山(美郷村にあった銅の鉱山)の絵はがき  
(井上真治氏蔵)。

## ★★★★★ 関連行事 ★★★★★

- ◎徳島市中心部の地質と石材見学 10月3日(日)
- ◎火打ち石・石器使用実演※ 11月3日(祝)
- ◎勾玉をつくろう 11月14日(日)
- ◎展示解説※
  - (1) 国会議事堂の石材 10月24日(日)
  - (2) 石造物 10月31日(日)
  - (3) 交易品としての石材 11月21日(日)

※観覧料が必要です

- 会 期 平成16年10月22日(金)～11月28日(日)
- 休 館 日 月曜日
- 会 場 博物館企画展示室
- 観 覧 料 一般 200円／高校・大学生 100円／小・中学生 50円

※20名以上の団体は2割引、土曜日・日曜日・祝日の小・中・高校生、学校の遠足は無料

# 田んぼの魚道

普通、魚道ぎょどうというと、コンクリート製の階段状のものを思い浮かべると思います。河道がどうに取水のための堰せきや河床勾配かしょうばいを緩やかにするための落差工らくさこうを設置すると段差ができてしまい、魚などの水生動物が上り下りできなくなってしまいます。それを防ぐために魚道が設けられます。どこの川にも必ずといっていいくらいあるので、皆さんもきっとご覧になったことがあるでしょう。

今回ご紹介する魚道は水路と田んぼとの間をつなぐ小さな魚道です。なんでこんな所に魚道を、とお思いになるかもしれませんね。これにはちゃんとわけがあります。

田んぼは田んぼでも、現在みられる田んぼと、一昔前の田んぼでは、構造が異なります。昔の田んぼでは水路と田面でんめんの高さが同じか、段差はあったとしてもわずかでした。しかし、今の田んぼは、必要な時にだけ水を入れ、必要のない時には水を抜くことができるよう、田面の高さをかなり上げてあります。そのため水路と田面との間には大きな段差が生じ、魚が上ることはできなくなってしまいました。

本来、コイやフナ、ドジョウ、ナマズ、メダカといった下流域の魚は、春になって川が増水すると、水に浸った陸地はんらんげん（氾濫原）へと入り込んで産卵したり、仔稚魚の間をそのような場所ですごしていました。人間が川を制御せいぎよするようになり、氾濫原が少なくなっても、一昔前までは田んぼが氾濫原の代わりとなっていたのです。それは田面が低かったからです。田んぼは魚の生息場所としても重要だったのです。



図1 水田魚道の設置の様子(小松島市立江榑洲土地改良区)

徳島県では今年の7月から水田魚道の実験を始めました。まだ始めたばかりで、詳しい成果のほどはわかりませんが、さっそくメダカやドジョウが遡上さうじょうすることが確認されました。今後、調査によって魚道が改良され、多くの田んぼに設置されて、魚が棲みよい田んぼが復活することを願ってやみません。  
(動物担当：佐藤陽一)



図2 斜めに切った仕切り板を配した木製魚道



図3 蛇腹状の溝のある樹脂製魚道(コルゲート管魚道)



図4 徳島市川内町に設置された魚道を上ってきた魚たち(メダカ、ギンブナ、ドジョウ)  
(徳島大学大学院工学研究科提供)

## 勝浦川の上流で採集した石は化石ですか？

採集された石は、表面に明瞭な凸凹の筋が見られる砂岩です(図1)。では、この石の表面にある凸凹は化石なのでしょうか？答えからいうと、これは化石です。この化石はトリゴニアとよばれる二枚貝で、日本では三角貝と呼ばれています。この化石は、本来殻があった部分が風化作用によって溶けてしまい、雌型だけになっています。



図1 勝浦川上流で採集された石

勝浦川の上流には白亜紀前期(約1億3000万年～1億年前)の地層(物部川層群)が分布しており、プテロトリゴニア、ニッポニトリゴニアと呼ばれる2種類の三角貝が産出します(図2)。プテロトリゴニアの「プテロ」は翼を意味しており、化石をよく見ると鳥の翼のように見えます。また、ニッポニトリゴニアの「ニッポニ」はまさしく日本のことを指しています。この2種類の殻装飾はまったく異なりますが、なぜか同じ三角貝の仲間になっています。二枚貝を分類する際、殻の形や装飾の違いで区別するのは、もちろんですが、これらの特徴より殻の内側の歯(蝶番)と呼ばれる部分がかつても重要になります。この歯の構造を観察することで二枚貝の大きなグループを決めることができます。三角貝の場合、歯の部分がかつて的



図2 プテロトリゴニアとニッポニトリゴニアの雄型



図3 三角貝のハの字型の歯

なハの字型をしています(図3)。この構造は三角貝だけがもつ特徴で、その他の二枚貝はもちません。そのため、プテロトリゴニアとニッポニトリゴニアは同じ三角貝の仲間だとわかります。

三角貝の仲間は三畳紀に出現し、ジュラ紀～白亜紀に世界中の海で繁栄しました。現在では、ネオトリゴニアとよばれる三角貝がオーストラリア近海の限られた海域に2、3種だけ生息しており、生きた化石のよい例になっています。しかし、なぜ、中生代の海で繁栄していた彼らは衰退してしまったのでしょうか？原因は簡単ではないですが、原因の一つとして新しい種類の二枚貝の進出があげられます。新しい種類の二枚貝とは、現在ではよく知られているアサリやハマグリといった水管を持った二枚貝です。水管とは二枚貝の殻の間から外に出している二本の軟体の管のことで、彼らは一方の管(入水管)を使って、水を吸い込み、体内で水に含まれている餌だけを濾して、もう一方の管(出水管)から水だけを排出します。三角貝は水管を持っておらず、水管の役目を殻の一部につかっています。水管という新しい機能をもった二枚貝の出現によって、徐々に三角貝の生息域は侵され、衰退の一途をたどったのでしょう。

勝浦川の上流で見つかるプテロトリゴニアやニッポニトリゴニアも白亜紀の一時期のみに繁栄した二枚貝で、今では見られない二枚貝です。今度、これらの化石を採集する機会があったら、彼らのたどってきた歴史を考えてみるのもおもしろいかもしれません。(地学担当：辻野泰之)

## 10月から12月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
野外自然かんさつ	アサギマダラをさがそう	10月10日	10:00～15:00	小学生から一般(30人)
歴史体験	土器づくり①	11月7日	13:30～16:30	小学生から一般(30人)
	土器づくり②	12月12日	13:00～16:00	土器づくり①とセット
	正月飾りをつくろう	12月19日	13:30～15:30	小学校高学年から一般(30人)
歴史散歩	伊島を歩こう	10月31日	8:00～16:00	小学生から一般(15人)
ミュージアムトーク	新選組隊士の手紙を読もう	12月4日	13:30～15:00	中学生から一般(50人)
室内実習	秋の野草かんさつ	10月17日	13:30～16:30	小学生から一般(20人)
	ミクロの世界—電子顕微鏡で化石を見よう	12月5日	13:30～15:30	小学校高学年から一般(10人)
みどりの探検隊	秋の吉野川に咲く花を探そう	10月3日	13:00～16:00	小学生から一般(10人)
	秋の母川に咲く花を探そう	10月10日	13:00～16:00	小学生から一般(10人)
みどりの工作隊	ドングリゴマを回そう	10月31日	10:00～13:00	小学生から一般(30人)
	リースを作ろう	11月21日	10:00～16:00	小学生から一般(30人)
	雑草で年賀状作り	11月28日	10:00～14:00	小学生から一般(30人)
企画展関連行事	徳島中心部の地質と石材見学	10月3日	13:30～16:00	小学校高学年から一般(30人)
	展示解説① 国会議事堂の石材	10月24日	13:30～14:30	小学生から一般
	展示解説② 石造物	10月31日	13:30～14:30	小学生から一般
	火打ち石・石器使用実演	11月3日	9:30～17:00の間随時	小学生から一般
	勾玉をつくろう	11月14日	13:30～16:00	小学生から一般(30人)
	展示解説③ 交易品としての石材	11月21日	13:30～14:30	小学生から一般

◎ミュージアムトーク、企画展展示解説および「火打ち石・石器使用実演」は申し込み不要です。

その他の行事は往復ハガキでお申し込みください。(受付は各行事の1カ月前から。10日前必着でお願いします。)

◎小学生が参加する場合は保護者同伴です。

◎企画展展示解説①・②・③および「火打ち石・石器使用実演」には企画展観覧料が必要です。(その他の行事は無料です。)

◎申し込み・問い合わせは徳島県立博物館普及係まで。

## 博物館友の会に入会しませんか！

現在の会員数は420名です。(8月17日現在)

10月以降に入会の方は、年会費の半額で、来年の3月まで、会員としての特典(常設展・企画展無料観覧等)を受けられます。

会費は、個人会員2,000円のところ1,000円、  
家族会員3,000円のところ1,500円です。

入会の方法、特典、会費、友の会行事等につきましては、友の会入会案内をご覧ください。友の会事務局までお問い合わせください。

●徳島県立博物館友の会事務局  
〒770-8070 徳島市八万町向寺山(徳島県立博物館内)  
TEL 088-668-3636  
FAX 088-668-7197



自然体験「お米をつくってみよう(田植え)」

## 博物館ニュース No.56

■発行年月日 2004年9月17日  
■編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山  
TEL088-668-3636 FAX088-668-7197  
<http://www.museum.comet.go.jp>